



高橋教授の

この人に  
会いたい

Vol.105

ゲスト

井山裕太

碁聖 棋士

2度の七冠達成から10年。囲碁界を席巻したAI「アルファ碁」の衝撃を経て、棋士の戦い方はどう変わったのか。対談では、日本囲碁界の第一人者井山裕太棋聖を高橋教授が直撃。AIとのシンクロナ率を誇る世界強豪との死闘や、勝率という数値に縛られない独自の思考プロセス、人間がAIを超えるための方法について語り合った。

# 日本囲碁の復活と 人間が打つ「意志」の未来

## アルファ碁から共生へ

**高橋** 本日は、囲碁界初となる2度の七冠達成や国民栄誉賞に輝き、現在は碁聖として第一線を走り続ける井山裕太碁聖をお迎えしました。実は井山碁聖のお父様が医療関係のお仕事をされている縁もあり、この対談が実現しました。私は医療情報の専門家として、生成AIが社会や人間の思考をどう変えるかに強い関心を持っていま

す。振り返れば10年前、2016年に人工知能のアルファ碁(Alpha Go)がイ・セドル九段を破ったことは、今世紀最大のニュースになると私は考えています。かつてこのサロンで依田紀基九段と対談した際、依田さんは「AIの碁も美しい」と仰っていました。井山碁聖はこの10年をどう振り返りますか。

間が突ける隙がありました。私がAIに初めて触れたときには、なるほどと思わされる手、それ以外の理解が追いつかない手の割合が、半分半分以上のイメージでした。しかし、今のAIは圧倒的です。中国の対局サイトなどでは、トップ棋士が「二子」つまり、あ

らかじめ盤上に自分の石を二つ置いて始める、約15目分の大きなハンデをもらっても勝つのが難しい。かつては打倒すべき「敵」でしたが、今は常に傍にいて、最善を教えてください。「師」のような存在へと変わりました。

**高橋** 医療の世界でも、AIによ

る画像診断は人間を超えつつあります。しかし、診断(正解)が出るプロセスを人間が理解できない「ブラックボックス化」が問題になっています。囲碁界では、対局中の形勢をパーセンテージで示す「勝率表示」が一般的になりましたが、そのあたりはいかがですか。

**井山** 全く同じです。AIが示す「勝率90%」という数字と、その根拠となる手が、なぜ良いのか人間には理解できないことが多々あります。10年前は人間が培ってきた「感覚」とのギャップに苦しみました。今は8割から9割は自分の感覚で翻訳できるようになりました。残りの1〜2割、どうしても理解できない手をどう自分の血肉にするかが、今の修行の核心です。

## 「ダイレクト三三」が変えた 常識と日本囲碁の復活

**高橋** AIの出現後、最も目に見えて変わったのは「布石(序盤の構想)」です。特に、以前から「非常識」とされた早い段階での「ダイレクト三三」には驚きました。三三入りとは、隅の陣地を奪う最も効率的な地点へ侵入する手法ですが、以前はこれを急ぐのは悪手とされていました。それが今や、最善の「定石(古来より研究され、双方最善とされる決まった打ち方)」として定着しました。

**井山** 本当ですね。以前は「序盤



撮影=関口宏紀



## 井山 裕太

Yuta Iyama  
碁聖  
いやま・ゆうた ●1989年5月24日生。大阪府東大阪市出身。石井邦生九段門下。小学6年生でプロテストに合格し、2002年入段。2009年史上最年少の20歳で名人獲得、同時に九段昇段。2016年史上初の七冠同時制覇。2017年名人奪還で2度目の七冠達成。年間8棋戦優勝は史上最多記録。日本棋院関西総本部所属。2016年内閣総理大臣顕彰受賞、18年国民栄誉賞受賞、22年紫綬褒章受賞

## 過去を切り離し、現時点での最善を尽くす——井山

で三三に入るのは、相手に外勢(厚み)を許して損」というのが鉄則でしたが、AIは「外勢よりも、確実な実利(目に見える陣地)の方が価値が高い」ということを数値で示しました。これにより、数百年にわたって受け継がれてきた定石の半分以上が消え去り、全く新しい景色が広がりました。

てきた「流れ」が、AIの冷徹な数値によって否定された部分があることです。しかし一方で、AIが示す「効率的で柔軟な石の運び」を学んでいくと、実は日本が伝統的に大切にしてきた「形の良さ」や「調和」が、一周回って見直されていくようにも見えます。私の大胆な仮説ですが、「AIが一番変えたのは、実は韓国ではなく日本ではないか」と考えています。

得られる環境だからこそ、盲目的に数値を信じるのではなく、なぜその手が良いのかを「自分の言葉」で説明できなければ、思考力は衰退してしまいます。これは教育現場や、私たちが取り組んでいる病院経営の意思決定でも同じです。

ができたところを突かれた内容でした。対戦相手に、そのような心理状態にさせる実力、実績が申九段にはあると感じています。こちらとしては、そのあたりを克服していくことが今後の課題だと思っています。

## 納得できる「理由」を自分で構築することが大事——高橋

高橋



## 高橋 泰

Tai Takahashi  
国際医療福祉大学教授  
たかはし・たい ●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了(医学博士)後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長を務めた

### 人間が打つ意味 プロセスの価値

高橋 医療でもAIの誤診が話

局でミスをした際、どうやって精神を立て直すのですか。  
井山 人間はどうしても「さっきのミスさえなければ、今頃これくらい有利だったのに」と過去に引きずられます。しかし、私は盤面を常に「今の状況から始まる独立した新しい対局」だと捉え直すようにしています。過去を切り離し、現時点での最善を尽くす。AIはミスをした後でも全く動じませんが、人間は焦って取り返そうとして二次災害を起こします。いかに自分を「今」に繋ぎ止めるか。これが、AI時代に人間が最も試されている能力かもしれません。

を取り戻していることが大きいと思います。

### 失敗との向き合い方

高橋 とはいくものの、現在の世界最強、韓国の申眞諝(シン・ジンソ)九段は「最もAIに近い」と評されます。実際に対局してみても感じましたか。

井山 申九段は確かにAIとのシンクロ率が極めて高く、史上最強の棋士と言っても異論はないでしょう。隙が全くありません。ただ、彼も人間ですから、対局中には心理的な揺れも感じます。申九段のように驚異的な精度で数値を記憶し、自分をAIに寄せていくスタイルがある一方で、私は数値が多少低くても「自分にとって進めやすい、納得感のあるストーリー」を選びます。AIには「前の手を生かそう」という執着がありませんが、人間にはそれがあります。自分が打った手を否定したくないという「心理的な揺れ」も人間特有ですが、それも含めての「人間の碁」だと思っています。

高橋 「正解」が24時間いつでも題になります。囲碁AIにも死角がありますか。  
井山 極めて複雑な死活(石の生き死に)では数値が迷走することもあります。また、人間の意図を汲み取れずに誤解することもある。だからこそ「AIがこう言っているから正しい」と思考停止することが一番のリスクです。

高橋 最後に、これからのAI時代を生きる若い世代へメッセージをいただけますか。  
井山 囲碁界ではAIの出現で「人間が打つ意味がなくなる」と言われましたが、実際には囲碁の人氣は高まり、観戦の面白さも増しました。AIという「正解」があるからこそ、人間がいかに悩み、もがきながら自分の意志で決断するのかという「プロセス」に価値が生まれているのだと思います。

高橋 「正解」を知ることよりも、納得できる「理由」を自分で構築すること。それがAIと共生する人間の知恵ですね。本日は、勝負師としての深い洞察をありがとうございました。